



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	English Capability-constructions : A Descriptive Study [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	山口, 和彦
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12342号
Issue Date	2016-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/62471
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Kazuhiko_Yamaguchi_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： 山 口 和 彦

学位論文題名

English *Capability*-constructions: A Descriptive Study

(英語の可能構文：記述的研究)

本論文の目的は、従来きちんと構文カテゴリーとして認定されてこなかった英語の可能構文の詳細な記述にある。本論文で言う可能構文とは、S can do, be able to do, be capable of doing, S enable O to do, it be possible (for N) to do, S make it possible (for N) to do の6つを指す。データとして、主に BROWN と FROWN の2つのコーパスを用いている。これらはそれぞれ1960年代、1990年代のアメリカ英語の書き言葉を集めた均衡コーパスであり、総計約200万語である。均衡コーパスの利点は、コーパスでの出現率が実際の相対的使用頻度を反映すると考えられることにある。さらに、頻度の低い構文の多様性を示すために、補助データとして雑誌 TIME アメリカ版の1989年から1993年の電子データ(約800万語)を使用した。データは、主に機能主義、伝統文法、認知言語学などの意味的なアプローチを参考にして分析し、6種の可能構文の主語、目的語、動詞、主節と関係節の使用法、主な使用ジャンル、の共通点と相違点を浮き彫りにしている。

第1章では、本論文の記述上の立場、扱う可能構文の提示、「可能」という概念の範囲の規定、使用する文法概念、用語の説明、動詞の分類、ジャンル分析について述べている。

第2章では、本論文で扱う6つの可能構文についての先行研究を概観している。can に関して先行研究は可能の意味に焦点を当て、モダリティ内での位置づけ、文法化、多義・単義説の検討など、理論的な考察をしているが、体系的な記述をしていないことを指摘している。他の5つの構文に関しても、be able to を除きほとんど体系的な記述を行っていないことを指摘している。

第3章では、可能の can の記述を行っている。最初に Brown/Frown コーパスから得られた can の全体像を示している。次に、主語、動詞、関係節、ジャンル分析に焦点をあてて分析を行っている。主語では、i) 代名詞主語が69%を占め、その結果として平均的な主語の長さが1.58語と短く、口語的な振る舞いをみせること、ii) 名詞句主語においては、非特定の主語が多く、総称文のような振る舞いを示す文が多いことを示している。動詞では、i) can と共起する11個の特徴的な動詞を抽出し、ii) この分析をもとに、can と共起しやすい動詞の意味分野を提示している。関係節の分析では、i) ギャップ(関係節内の欠けている要素)によって好まれる先行詞が違ふこと、ii) ギャップが目的語の時の頻度が高く口語での分布に似ていること、関係詞は that が好まれること、そして、全体として主語に代名詞が多いことから可能の can は口語的な特徴をもっていることを示唆している。ジャンル分析では、フィクションでの頻度が一番高く、次が散文と報道文で、学術文での頻度は一番低く、ここからも can の持つ口語的側面が裏付けられていることを指摘している。

第4章では、5つの可能構文について記述を行っている。記述は、主語、共起する助動詞、動詞、名詞修飾節、ジャンル分析を中心に行い、be able to do では、i) 全体としては、共起する助動詞が豊富であり、様々な統語的環境に現れること、ii) 現在形(be able to が can の代用表現ではない時)では、a) 特定の有生主語が多い、b) 移動、作成・産出動詞の頻度が高い、iii) 学術文での頻度が高い、ことが判明している。

be capable of doing では、i) 現在形と過去形が多く、助動詞と余り共起しない、ii) 主語は人や抽象名詞が多い、iii) 作成・産出動詞の頻度が高い、iv) 基本的に統語的に埋込まれた環境には生じにくい、v) 散文での頻度が高い、ことが報告されている。S enable O to do では、i) 現在形と過去形が多く、助動詞とはあまり共起しない、ii) 主語は典型的には抽象名詞、目的語は主に抽象名詞で、大多数が代名詞か特定の名詞句である、iii) 作成・産出、行為(doing)、移動動詞の

頻度が高い、iv) 否定文が非常に少ない、v) 関係代名詞しか名詞修飾が見られず、主語ギャップが圧倒的である、vi) 散文や学術文での頻度が高い、ことが明らかになった。it be possible (for N) to do では、i) 主に現在形で使われ、助動詞と余り共起しない、ii) 意味的な主語は有生で、かつ特定の名詞句が多い、iii) 破壊、入手、移動動詞の頻度が高い、iv) 名詞修飾用法が非常に少なく、基本的に埋込まれた環境には生じにくい、v) 学術文での頻度が高い、ことが示されている。make it possible (for N) to do では、i) 主語はもっぱら抽象名詞で、意味的な主語は圧倒的に有生が多い、ii) 現在形と過去形が多く、助動詞と余り共起しない、iii) 基本的に埋込まれた環境に生じにくい、iv) 学術文での頻度が高い、ことが明らかになっている。

第5章では、第3章と第4章の結果をまとめている。第一に、can 以外の5つの構文では、be able to を除いて、現在形と過去形での頻度が高く、共起する助動詞は主に義務と確実性を表すこと、第二に複雑な統語環境は、be able to を除いて、避ける傾向があること、第三に、可能構文全体では、i) 主語の3つの性質(代名詞の割合、非 SAP (Speech Act Participant) の割合、特定性の程度)がそれぞれの構文で異なり、ある程度分業化されること、ii) 構文によって好まれる動詞の傾向が違ふこと、iii) 関係節では主語ギャップと that が好まれること、iv) それぞれの構文によって好まれるジャンルの傾向が違ふこと、が指摘されている。